

モンシロチョウの赤ちゃんだって人間と一緒に！ 品川区立荏原西保育園（東京都品川区）

グループごとに大切に育てている“二十日大根”が生長して、プランターが葉っぱだらけになっているのを見て驚いていた。そんな中、葉っぱに小さな穴が空いていることに気づき「これは、何で空いてるんだあ～？」と悩み始め、何日も葉っぱを裏返しては確認をして観察を続けていると…。

「先生、分かった！この穴はきっと虫が食べた跡なんだよ」

「葉っぱを食べたということは…」

「この葉っぱは、美味しいんだね！」

「先生！虫が食べるということは人間も食べられるってこと？」

という話題になりました。

そこで収穫した“二十日大根”を調理室に持参し、味噌汁の具として調理してもらおう。食べると「すごく甘くて美味しい！」「サイコーだ！」という感激の声が子どもたちから出ていた。



【数日後】

「先生、二十日大根の葉っぱの穴が多くなってよ。どうして？」

「どうしてかな？誰か食べたんじゃないの？」(保育者)

「違うよ！僕たちは食べないよ！」と言いながら、シャベルで葉っぱを1枚ずつ丁寧に裏返して、熱心に観察していた。

無造作に葉っぱをめくっている友達に「そんなに乱暴に見たら、葉っぱが『痛い！』って言うよ。もっと優しくめくってあげて！」と言うと、

いわれた子は「ごめん、ごめん。気を付けるよ。葉っぱさん痛くなかった？」と言う。

<みんなでそぉっと葉っぱをめくっていると>

「先生！虫がいる！」

「どんな虫？」(保育者)

「緑の虫！先生、名前知ってる？」

「何の虫か、先生も分からないな～？何かで調べてみれば…」(保育者)

<保育室に走って行き、昆虫図鑑をペラペラめくって調べていると>

「あつた！これだ！」

「名前分かった？」(保育者)

「分かったよ！モンシロチョウの赤ちゃんだ」

「葉っぱの穴は、モンシロチョウの赤ちゃんが食べていたんだね！」

「それは嫌だな。せっかく葉っぱが大きくなったのに…」

「違う葉っぱに移してあげようよ！」

「それはいい考えだね。そうしようよ！」

「いい考えだと思うけど、このプランターの中にたくさんいるんだけど…これ全部移せるのかな？」

<子どもたちはプランターを囲んで考え込む。数分後>

「このまま、プランターに置いてあげようよ」

「やだー。モンシロチョウの葉っぱじゃなくて、この組のみんなの葉っぱなんだよ」

「それもそうだね」

「ねえーみんな、このあいだ調理の先生をお願いして、二十日大根を味噌汁の中に入れてもらって食べたじゃん。だから、この次はチョウチョの番だよ。葉っぱの中に赤ちゃんがたくさんいるし、動かすのは可哀想だよ。だからこのプランターの中の二十日大根はモンシロチョウの赤ちゃんに譲ってあげようよ」

「僕もそう思う。だって見てえー、葉っぱに小さい穴ばっかりだよ。はらぺこ緑虫なんだよ。この葉っぱがないと大きくなれないし、もしかしたら死んじゃうかも知れないよ」

「それは、可哀想！緑虫のお母さんだって悲しむよ！」

「決定！このまま、そーっとしておこう」

「さんせーい」

プランターごと虫かごにして飼育を開始する。



<日に日に二十日大根の葉っぱが少なくなっていく様子を見て>
「すごい勢いで葉っぱが無くなっていくよ。モンシロチョウの赤ちゃんてすごい食いしんぼうなんだね。僕、びっくり!!」
「でも、人間の赤ちゃんだってそうじゃないかな？」
「どうして? そう思うのか、先生に教えて?」(保育者)
「だって、僕だって、赤ちゃんの時はたくさんミルク飲んでたもん。人間はミルクで大きくなったし、緑虫は新鮮な葉っぱがないと大きくなっていかないんじゃないの?」
「君って優しいのね!」(保育者)



【考察】

子どもの気付き

二十日大根を育てる中で小さな穴に気付く。

「これは、どうしてなんだろう?」から幼虫、緑虫を発見する。

「なんの虫なんだろう?」という探求心から図鑑などを使って友達と一緒に調べ始める。

モンシロチョウの幼虫と分かり“育てたい”という気持ちと二十日大根の葉を食べられてしまって“残念”という気持ちの間で葛藤する。

クラス全体で話し合い、“チョウチョの赤ちゃんのために新鮮な葉っぱを譲ろう!”と決める。

保育者の援助

子どもの気付きを見守りながら、“命の尊さ”を知らせるために子どもたちの話し合いを大切にしました。子どもの質問にすぐに答えを返さず、子どもたちの中で話し合った結論を認めるようにしました。

幼児の育ちや経験

さつまいもを育てることから、様々な興味・関心が広がった。

虫も『お腹がすく!』『小さくて弱い!』『死んでしまったらかわいそう!』など様々な生活体験を通して“命の大切さ”を知った。

自分たちが育てた植物などを通して、子どもたちの“葛藤する心”も見えた。

人間も動植物も“同じ命がある生き物”であるという感性が子どもたちの心の中に確実に育ってきていることを感じた。

みどころ

二十日大根を熱心に観察していることで、二十日大根を大切にしていた子どもたちが、葉っぱを食べる緑の虫に注目し、次第に緑の虫への親しみをもち、生き物への命に気持ちを向ける姿に変容しています。「自分たちは一度食べたから、今度は虫の番」「赤ちゃんに譲ってあげよう」「でも、人間の赤ちゃんだってそうじゃないかな?」という言葉から、「同じ環境で生きていること」や「自分もたくさんミルクを飲んで大きくなった」という自身の成長を子どもなりに理解している様子がうかがえます。